

## BUSINESS

ビジネストーク

## TALK

# 「史実を伝える」

頭取 高橋 祥二郎



戸が首都に。司馬さんは「大久保の卓越した決断力が、このときあざやかに躍動した」と語っています。そして、「書生」は明治の郵便制度創始者・前島密（1835〜1919）だったと披露されています。

今や世界有数の首都圏に成長した「東京」。若き前島密の「先見性」と、それに応えた大久保利通の「決断力」に改めて感じ入ります。

その一方で、「東京」は一極集中を惹起し、さまざまな問題も抱えることとなり、解決策として例えば文化庁の京都移転なども現実化しつつあります。

「地方創生」の観点からは、省庁移転ももちろんですが、「人口減少」という厳しい現実を直視した、もっと抜本的な施策が展開されなければ「持続可能」な地方が創生されないのでは、との思いに駆られます。具体的には、50年後、100年後を見据えたランドデザインを描くことが今こそ必要と痛感します。

司馬さんはたびたび湖国を訪問されました。そして滋賀を地理的、歴史的、文化的に「日本の中の日本」と評価されました。私たちは、滋賀の史実を知り、その「良さ」に今一度思いを致し、次世代に伝えて、評価に込められた司馬さんの「熱い思い」に応えなければ、と思います。

「江戸（東京）遷都」は、若い書生の一通の「意見書」が原動力となって実現した、と知りました。興味深い史実に感じ入りました。

今年には歴史小説家・司馬遼太郎さんの没後20年です。代表作『街道をゆく』が湖西の旅で始まるなど、司馬さんにゆかりの深い滋賀県。先日、米原市内では記念シンポジウムが行われました。全国でも多彩な記念イベントが開かれています。

私は連休前、立ち寄った書店で司馬さんの本『この国のかたち』を手に取り、休み中に読ませてもらいました。司馬さんの歴史観「司馬史観」はさまざまな話題を呼んできましたが、

史実を具体的に掘り下げて読者に分かりやすく、正確に伝えられてきた努力には読むたびに感銘をうけます。

「東京遷都」に至った経緯については『この国のかたち』第3巻で語られています。公家の多くが遷都自体に反対するなか、当時の大勢は、首都をいったん「大坂（大阪）」に、ということでした。

その折、明治政府の実力者・大久保利通のもとに若い書生から一通の「意見書」が届きます。大坂市中の道路が狭いことなど精緻な分析に基づいて「江戸こそしかるべき」と主張し、江